

# 台兒庄派遣部隊の再戦 —— 第二回攻城

姜 克 實

## 六、第二回目攻城戦の兵力

1938年3月24日第一回目の攻城戦後、台兒庄派遣部隊に対して武器、弾薬の補充が行われたほか、歩兵二個中隊、砲兵二個中隊と一個小隊、重機関銃1/4中隊（2挺）の戦力増強も行われた。第二回目攻撃前の3月26日夕方、台兒庄附近に集まった日本軍（台兒庄派遣部隊）は歩兵六個中隊、砲兵三個中隊、合計人員2300余名になり、砲兵火砲10門、歩兵火砲8門、重機関銃14挺、軽機関銃36挺<sup>1</sup>であった。第一回目の攻撃時に比べると、歩兵の数は変わらなかったが、砲兵の戦力は倍増した。新たに増えた火砲には、支那駐屯軍砲兵の九六式15糎榴弾砲2門も含まれている。実戦投入した日本軍最新式の火砲で、4月1日、中国軍が保有したドイツ・ライオンメタル社製15糎榴弾砲2門が現れるまで、台兒庄戦場の覇者であった。この種の火砲は、日本軍が1934年から開発してきた最新式野戦重砲で、芦溝橋事変の直後、試験運用中の4門を含め、合計8門が天津に運ばれ、支那駐屯軍の砲兵部隊に実戦装備された<sup>2</sup>。台兒庄に入った内野貞利中尉が指揮する臨時野砲中隊はその一部である。履带式牽引車のほか、物資を運ぶ自動車、弾薬車（非自走）、砲兵観測車、ガソリン積載車など十数輦の自動車列の集団で構成し、機動力は高く、馬牽引を主流とする普通の師団砲兵と一風変わった威風を呈した。火砲の射程は12キロ、砲弾一発が40キロもあり、射程、精度、威力とも優れた火砲である。その破壊力が恐れられ、台兒庄の戦場で終始中国軍に狙われつづけた。

## 七、戦闘部署

3月26日午後8時20分 翌日朝の攻撃のため、第二大隊長安永興八中佐から次の要旨の命令が下達された。

### Ⅱ大隊命令要旨

一、敵ハ主力ヲ以テ台兒莊ヲ固守シ一部ヲ以テ近ク東西両面ヨリ我ヲ包圍攻撃セントシツツアリ

二、大隊ハ明日払暁砲兵ノ城壁破壊射撃及突撃支援射撃ニ引続テ一挙ニ破壊口ヨリ城内ニ突入シ台兒庄ヲ奪取セントス

三、第六中隊（1/4MG、1/6Pヲ属ス）ハ第一線



27日払暁四時、第五、第六中隊はそれぞれ突撃位置に入った。

#### 八、攻撃と突入

以下は歩兵第六十三聯隊戦闘詳報が記録した攻城の様子である。

「午前六時少々過歩砲火器一斉ニ射撃ヲ開始シ第一線突撃部隊第六中隊ハ勇躍昨夜來工兵ノ構築セシ交通壕ヲ利用シ」前進を開始した。城外北東の裴庄付近の砲兵陣地に対して、敵は東方、北方から接近し、砲撃を妨害しようとしたが、援護歩兵と野砲第一中隊の圧制射撃でこれを制した。しかし、「午前九時支那駐屯軍重砲中隊東方及後方ヨリ有力ナル敵ノ包圍攻撃ヲ受ケ自衛上之ニ射撃ヲ指向シ」たため、支援射撃の任務は、他の砲兵に肩代わりされた。

「各種重火器ノ適切ナル射撃ニヨリ城壁附近ノ敵漸ク沈黙スルニ到リ 第六中隊敢然起チテ破壊孔ニ突進シ 同中隊配属機関銃小隊第五中隊相踵イテ城内ニ向ヒ突進ス」



3月27日の破壊口と思われる。水濠が見えないので、城内からの撮影であろう。破壊口が相当広がっており、15糎榴弾砲の威力を示す。第六、第五中隊はここから突入。

此頃破壊孔ノ西方城壁ニ敵機関銃現出シ突撃部隊ニ射撃ヲ集中シ又破壊孔ニ向ヒ城壁上及ビ城内ヨリ各種火器十字火ヲ浴セルト共ニ敵兵手榴彈ヲ投擲シツツ殺到シ 戦闘激烈ヲ極メ幹部以下死傷続出スルモ將兵之ニ屈セス各隊互ニ協力シ戦力ヲ最高度ニ発揚シ一意奮戦力闘交戦一時間余リ遂ニ第六中隊城内一角ヲ占領シ 第五中隊之ニ続イテ城内ニ

地歩ヲ確得シ 午前八時城頭日章旗ヲ掲クルニ至ル

その後、機関銃中隊も第一線部隊の後に城内に進入し第一線部隊と協力して戦果拡張に努めたが、弾薬の不足及び砲兵との通信連絡線が「殆ど切断セラレ相互ノ通信連絡概ネ杜絶シ」たため、城外からの支援射撃は弱められた。その上、

敵ハ我第一線部隊ノ正面ニ益々兵力ヲ増加シ其抵抗鞏強ニシテ戦果ノ拡張捗シカラス第一線ヲ以テ午前十一時二十分突撃路正面ノ中央寺院ノ一角ヲ占領セシ以後戦況意ノ如ク進展セス敵ト近距離ニ対峙シ 時々敵ト接戦格闘ヲ交エツツ日没ニ至ル<sup>4</sup>

午後7時10分頃、第七中隊の一小隊も城内に入り、東北部の第五中隊の左側において地歩を固め、また夜暗に乗じて、速射砲2門と第二歩兵砲小隊及び補給弾薬も城内に届けられ、補給と増強が行われた。「衆ヲ恃ム敵ハ夜暗屢々襲撃ヲ試ミタルモ我第一線部隊悉ク之ニ多大ノ損害ヲ与エテ撃退」した、という。

守備側の中国軍第三十一師の戦闘詳報は次のように記す

5時30分、敵砲約10余門、集火力突向台庄行墙壁射击、北城垣时有倾塌、两北门均被击毁……6時30分、敌步兵约六七百名、在炮火掩护下向我猛扑、经我以炽盛火力歼灭甚众、敌续有增加、更番近迫。7时顷我守两北门之第一八一团第三营牺牲殆尽、被敌突入300余、即植立日旗数面、势甚猖獗。我王师附冠五督率第一八六团第二营扼险堵击、经激烈战斗、…卒将侵入之敌击毙大半、…残敌均逃据东南碉楼及大庙内…我第一八二团第二营即控置于北门两侧、敌续有侵入、均被击退、…至9时、敌仍图再举、但已力竭声嘶、台庄城内外之攻防亦从兹开始<sup>5</sup>

日本軍の戦闘詳報と比べると、殲敵の情景描写、殲敵数はともかく、場所と過程など基本情報が略一致している。

攻城時の激戦について、第二大隊の戦闘詳報は次のように記している。

支援射撃の下で、第一線たる第六中隊は「煙幕ヲ構成我企図ヲ秘匿シツツ」敵弾を冒しヤマ破壊口より、第五中隊はヤマ破壊口隣接の左破壊口より城内に突入した。突入部隊が城の東北一角を占領したのは「午前六時四十五分ナリ」。

此ノ間敵ノ掃射スル無数ノMG弾ハ水濠ノ水面ヲ打チテ水煙トナリ 絶間無ク投スル手榴弾ハ丈余ノ水柱トナリ壯観ヲ呈シ 突撃部隊ハ…壮烈戦ヲ展開セリ…然ルニ敵ハ数百ノ一団トナリ逆襲シ来タリ 又敵MGノ側射猛烈ヲ極ム突入部隊攻撃ノ氣勢ヲ緩メス勇



猛果敢手榴彈戰ヲ以テ戦果ヲ拡張ス時ニ第六中隊長伊藤中尉敵弾ニ斃ル 第五中隊長、第六中隊ヲモ併セ指揮シ…遂ニ城内東側中央寺院ノ一角ヲ占領ス…敵ハ尚モ数百ノ敵団トナリテ屢々逆襲シ来リ其ノ都度猛烈ナル手榴彈戰ヲ以テ反撃午前十一時二十分同地ヲ完全ニ占領セリ。

その後、双方が相対峙して夜を迎えるが、「嚴重ナル警戒裡ニ患者ヲ收容シ夜ヲ徹ス」<sup>6</sup>。

以上を総合すると、各種火砲による一斉砲撃の開始は朝の6時。その後、第六、第五中隊約300名の戦闘員は構成煙幕の掩護で城壁に接近、三メートル幅の水濠を渡り、ヤマ突破口を突撃し、6時45分城壁の一角を占領、8時地歩を固め、城壁に日章旗を掲げるにいたる。砲撃中の支那駐屯軍の野戦重砲2門は、妨害され支援できなくなったと記されるが、それは9時からの出来事とすれば、突撃部隊がすでに城内突入後の話であろう。つまり、突入前後では、砲撃がうまく行ったと思われる。以上の図面にある破壊口の様子を見れば、砲撃の凄まじさが窺える。第一線部隊は城内突入後、中国軍の数回の逆襲を撃退しつつ数百米先まで進み、城内東側中央寺院の一角を占領して、その後敵我双方の対峙状態になった。この「中央寺院」、「大廟」と呼ばれる建物は、記者盛成の記録によれば「東岳廟」というが、「東岳廟」（泰山行宮）は小北門に近いところにあり、戦闘後期の激戦地であるが、最初の突破口と距離が遠い。盛成の「三吊台兒庄」に地元住民の証言を録しており、それは城内東北に位置する「清真寺」とであると分かる<sup>7</sup>。清真寺は、今でも「弾痕の壁」で知られている激戦地だったのである。

また、この日9時、九六式野戦重砲の陣地が襲撃され、砲撃支援が不能に陥った記述に象徴されるように、城外の砲兵陣地を狙った中国軍の妨害、襲撃も活発であった。

払暁以来第七中隊主力位置ノ東方部落歩兵砲中隊野砲及支那駐屯重砲中隊ノ東方及ビ北方ニハ 近ク敵部隊近接シ重砲中隊及野砲兵一中隊ヲ除ク各部隊ハ第一線部隊ノ台兒庄攻撃ニ協力シツツ之カ排撃ニ努メ 東方ヨリ劉家湖ニ迫レルモノ約五百 裴庄東南部落ニ迫レルモノ約五百 又裴庄東南部落ヲ攻撃セルモノ約五百 概ネ午前七時之ヲ撃退シタルモノ約千ハ邵庄及ビ裴庄東方蘭陵鎮～台兒庄道ノ線ニ止リテ敦固シ動スル色ナク工事ヲ実施シ本戦闘ニヨリ我ノ戦死傷続出ス<sup>8</sup>

九六式野戦重砲兵部隊(106名)は、そのため砲撃を止め陣地の防御戦に追われ、「抵抗中ノ石井一等兵 村瀬一等兵 段列ニオイテ警戒中ノ岡部一等兵何レモ戦死」し、午後福榮聯隊長が率いる台兒庄攻略部隊の到達によってようやく危機から逃れた<sup>9</sup>。

ようするに、城内の激しい戦闘だけではなく、城外でも数千人の中国軍部隊(第二十七師)は、台兒庄の東、北から日本軍の後方を包囲する動きを見せていた。もともとこの面の警備に当たる第二中隊(松原石人大尉)は前の晩、急に嶧県に呼び戻されたため、砲兵陣地など後方の防御

は手薄になったことも、砲兵隊が危機に陥った理由である。

中国軍の戦闘方法について、第二大隊の戦闘詳報が記す

台兒庄城内市街戦ニ方リテハ敵ハ手榴弾投擲手ヲ主体トナシ之ニ若干ノ小銃手ヲ配合編成ス 重機、軽機ハ其ノ殆ドヲ全部城内各所ノ望楼頂上ニ配置シアリタリ…白兵ヲ使用スル意思ハ薄弱ナルモ極メテ至近ノ距離ニ於テ抗戦シ手榴弾ノ効果ニ頼ル意至極濃厚ス 因ニ敵ノ行フ逆襲ハ殆ト手榴弾ノミヲ使用セリ<sup>10</sup>。

城内市街地の攻防は、手榴弾を使用した接近戦で、城外の騷擾は、掩体工事を築き一步一步前進し「執拗ニ近接シ任務達成ヲ妨害スル」、という戦法であった。

#### 九、27日における日本軍の損失

この日の激しい戦闘で、第二大隊第五、第六の二個中隊を中心に、38名が城外、城内で死亡した。15日間に亘る台兒庄の戦いの中、24日の攻撃時の損害を超える、最大の損失を出した日である。城内に突撃したのは、二個中隊の約300名前後の部隊であるが、死傷を合わせれば損失が3分の1を越えたと推定する。第五中隊兵士渋谷昇の日記はこの地獄の修羅場の様子を次のように記す。

#### 二十七日

…天亮六時半、各炮队开始发炮、其音响震动天地、第五第六两中队结成敢死队由城墙之破裂口冲入。墙边有河浜、手榴弹如雨飞来、数人中弹倒毙、其惨状实为人间之地狱。队长命令、不管死伤如何惨重、各应尽本分、步兵几乎全员倒毙、手榴弹仍如雨飞来、我身边亦飞来数枚、我无负伤、非常奇迹。经激战方得占领城市之一隅、我方已牺牲半数以上云。然后将死伤者全部收容于大房屋内、黄昏、敌再度袭来、我方受伤数人、手榴弹仍如雨似雪飞来。夜间我与林原、足立两君刺毙敌兵九名、通宵枪声不绝。<sup>11</sup>

「歩兵はほとんど全員が死傷」、「死傷半数以上」は日記に散見される渋谷昇の大きな表現であるが、歩兵の戦闘力は半分近くに減少したのは事実であろう。

台兒庄作戦全体（15日間）において、攻城と城内作戦を担当する第二大隊の死者総数は延べ122名である。第一回目の攻城の死者32名に足して、3月27日時点で合計70名になった。

なお、戦後作成の「戦没者名簿」<sup>12</sup>の記載から算出した歩兵第六十三聯隊全体の台兒庄作戦期間（3月23日－4月7日）の死者数は230名である。この数字は戦闘詳報の記述ではなく行政側が把握した「戦没者」の数で、遺族年金の支払いにも関わる、精確なデータである。

これに対して、戦闘詳報の記載では196名であった<sup>13</sup>。戦後の統計が多くなる理由は、死亡の日時に合うが、場所が特定できない「野戦病院」での死亡者など20名を始め、死因、場所が確認できない者計26名が計上されているからである。

3月27日、安永第二大隊の戦死者38名は文末の附表を参照されたい<sup>14</sup>。

## 十、墓標の考証

死亡者は誰か

以下では、1938年4月7日、ハンガリー生まれのカメラマン、ロバート・キャパ (Robert Capa) が台兒庄戦場で撮った二枚の写真を通じて、3月27日の死者について考証しよう。

4月7日、台兒庄の戦闘が終了した後、キャパ一行は大運河を越え、台兒庄の戦場に入り、城内、城外で、多くの戦闘場面をカメラに収めた。なかには、日本軍兵士の墓標を写した写真が二枚ある。はっきりしていないが、死者の情報が一部判読できる。



写真一(南より)

写真一の墓標に書かれた文字は左側から判読すると

左一、「昭和13年3月27日午前十時戦死」

左二、「昭和13年3月27日午前八時戦死」

左三、「昭和13年3月27日午前八時戦死」

左四、「昭和13年3月27日午前八時戦死」

左五(判読不能)

四人とも、3月27日、突撃時の死亡者だと分かる。8時と10時の時間から判断すれば、すでに城内に突入して戦果拡張する間、死亡した第五、第六中隊の兵士であろう。これは火葬地のヒントにもなるが、後で考証するように、場所は城内東北門に近い空き地である。



写真二(北より)

類似した写真がもう一枚がある。明るさと陽光から見れば、同じ日(あるいは同じ時間帯)の作品ではないようが、墓標の形と高さの並びから、同じ墓標群の反対側からとった写真だと分かる。写真二の左第一本目は、写真一右側の第一本と同一であり、つまり写真二の左から五本目までは、写真一の裏面に当たる。

読める文字を判読すると

左一「故陸軍歩兵上等兵 砂田正人 火葬之地」

左二「故陸軍歩兵伍長 安部清 火葬之地」

左三、四 判読不可

左五「故陸軍歩兵伍長 渡部芳夫 火葬之地」

左六「故陸軍歩兵伍長 大江定一 火葬之地」

左七 判読不可

となる。

写真一の右側第一本目は、文字の判読は不可能であったが、写真二の該当墓標は「故陸軍歩兵伍長 大江定一 火葬之地」と書かれており、「戦没者名簿」を確認すると大江定一は翌3月28日に死亡したと記録されているので、写真一の該当墓標(四角い)の文字は、「昭和13年3月28日〇〇時戦死」となる筈である。

名前がわかった砂田、安部、渡部、大江の四人はすべて戦後に作成された「戦没者名簿」と照

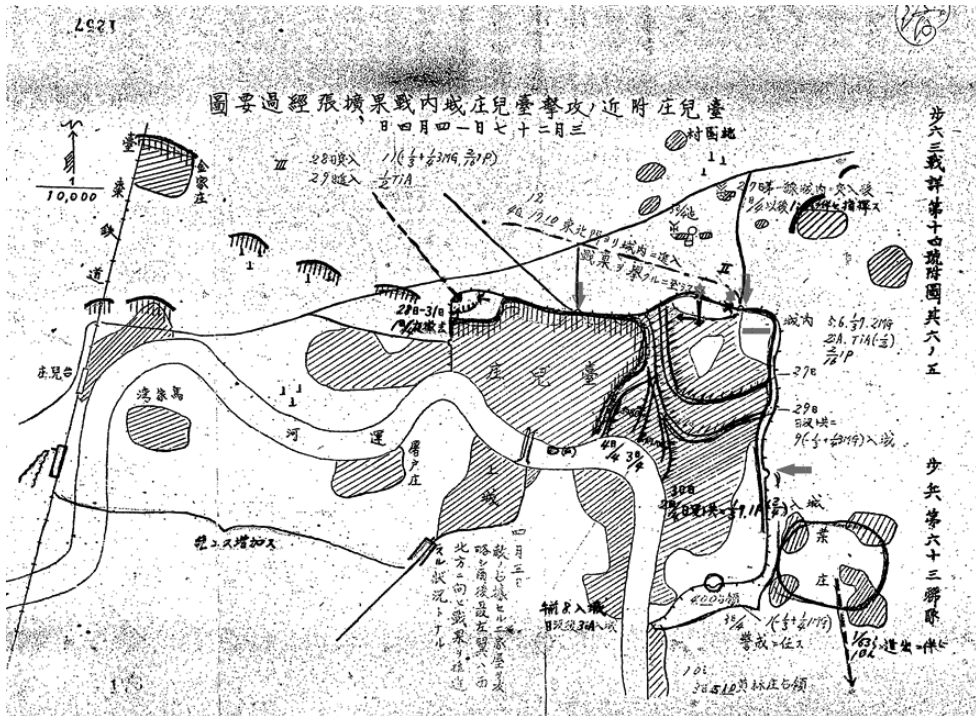


合でき、出身地が分り、階級、死亡時間、死亡場所の情報も写真と一致する(巻末掲死亡者名簿※の記しをつけた箇所を参照、砂田正人は名簿上、3月28日の死亡になっているので巻末の名簿にない)。

また第六十三聯隊の戦闘詳報に記載した第六中隊長伊藤俊雄中尉(八束郡玉湯、現在松江市内)も、「戦没者名簿」のリストから見出せる(名簿には“大尉”となっているが、死後特進後の軍階)。これで、墓標の死亡者の所属、名前、死亡時刻、出身地が判明したのである。

## 場所はどこか

一方、写真に写った墓標の場所はどこか？ 筆者は最初、空き地があることで、写真一は東北門城外の地形だと思った。突撃の出発地で、戦死してもおかしくない場所である。こう推理すれば、写真一は城壁との位置判断で東西一列の並びになるが、しかし、解決出来ない難問が写真二にある。つまり写真二に写った影である。写真二は写真一の背面であるとすれば、日差しは北から照射することになる。だから推理は成立しない。



台児庄城内戦果拡張經過要図

ヒントを与えてくれたのは戦地記者范長江の記事であり、「東門内に敵が残した将校の墓標が40あまりあった」、という<sup>15</sup>。同じ描写は、盛成著「再吊台児庄」にも描かれている。東門内にて「城壁に沿い北に向かう途中、私はある菜園地にある日本軍の墓前で立ち止まった。東西二箇所があり、間は数十歩の距離である。墓は併せて36があり…。墓は小さい土饅頭のように、木製の墓標に階級と姓名、そして戦死の年月、場所を書いてあった」<sup>16</sup>。

ともに、墓の場所は城内の空き地と書いてあった。城内にこのような空き地はあるか。日本軍の作戦要図を調べてみれば、確かに幾つかの空き地が確認できる。地図上の白い部分で、それぞれ東門、東北門、西北角附近にある。しかし、范長江がいう「東門」だとすれば、難が多い。東門(図の右の矢印は東門)なら、墓標が南北に一列の配置になるが、写真一の位置が納得できても、同様に写真二の日陰の問題が解決できない。四月の太陽は西北から差し込むことになるからである。また主要な戦闘エリアからだいぶ離れたこの場所に運んで埋める必要性も考えにくい。500メートル以上もあるため交戦中の運搬はリスクが高い。だから范長江記者の東門内の説も成立しない。

一方、北に向く城内内で、東西一列に並ぶとすればすべての疑問が解決できる。北向きの城門には、小北門と東北門(大北門)二つがあるが、小北門は、陥落していないエリアにあり、城内にも空き地がないので、可能性があるのは東北門のみである。作戦地図を見れば分かるように、東北門は東の端の角近くに位置し、よそ者の范長江に「東」門と認識されても不自然はない。しかも空き地の存在も確認できる。

すなわち、墓標の位置は、図面のように城内東北角附近に東西一列に並んでおり(城内東北、線で示す場所)、写真一は南から北に撮影したもので、正面に写っているのは東北門である。写真の右側のきれたところに、角の望楼が立っているはずである。

写真二は東門を背に北東から南西への撮影で、日陰の角度(午後一時の影)も合理的であるし、右手西南側の市街地も確認できる。この場所は27日攻城作戦の突破口に近い激戦地の後方にあたる場所で、のち第二大隊の本部が置かれた場所でもある。4月6日、日本軍が撤退する前、ここを火葬場に利用した事実も、第五中隊兵士渋谷昇の日記から確認できる。

渋谷昇は、3月31日、命令を受け「初めて遺体の収容にとりかかり、6、70体を集め、…4月1日午前六時に茶毘に付した」と記す。写真の墓標は、3月27、28日の死亡者のみなので、この日火葬の後に立てたと思われる。

その後、戦死者が増え、4月4日の夜間、渋谷はまた遺体の警備を命じられ、5日、第三小隊と再び火葬の任務に当たった。そこで、第三分隊所属の親友「三澤君」の遺体を探そうとしたが見つからなかった(三澤整一、能義郡安来出身、3月24日死亡)、と記している。撤退当日の6日、林原君と一緒に4月3日に死亡した足立君の遺体を火葬場に運んだ時、「敵弾の射撃はいよいよ激しくなり、望楼に身を隠し、大隊本部の負傷者も三人がいた」と記している<sup>17</sup>。これらの記述から判断すれば、火葬場は東北角の望楼、大隊本部に近い城内であることが分かる。撤退直前の4月6日の火葬と「死傷者の武器の収集」はかなり厳しい条件下で行われたようであり、夜暗になると急いで東北門から全員が脱出したので、4月1日のように、墓標まで立てる余裕はなかったと思われる。火葬未完了で放置された遺体一が、翌日複数の記者に目撃されている<sup>18</sup>。

また、『渋谷昇日記』には、3月31日、城内で集めた遺体は60-70と記述しているが、この数字は合理的であろうか。「戦没者名簿」を調べると、3月27-3月30日の間、歩兵第六十三聯隊全体の戦死者数は合計101名であり、なかの11名は城外で死亡したことが判明できる<sup>19</sup>。残りの90名には、28日、反対側の西北角で城内に突入した第三大隊第十一中隊の死者、また城

外であっても、概括的に戦死の場所を「台兒庄」と表現したものもあろう。この部分を除くと、城内の第二大隊正面戦場（東）における死者数として、日記に記された60－70名は至当であろう。その大半は、27日突入時の死者だと思われる。

おわりに

3月23日から4月6日の15日間、台兒庄城内で戦闘を行い、東の半分以上の市街地を制した日本軍部隊は、歩兵第六十三聯隊第二大隊の1000名弱の戦闘員であった<sup>20</sup>。死傷者は全体の半数近くに達しながら、人員の補充が行われず、4月6日の撤退まで戦い通した。これは消耗の激しい第一線部隊を何回も入れ替え、再編した相手の中国軍と決定的に違う。そもそも一途盲進した日本軍にはこの時、補充する兵源はなかったのである。戦いに疲れきり、後半になると士気が大いに落ち込んだと思われる。

統計を見れば、第二大隊はこの15日間、配属部隊を含む1229名、馬179匹のうち、122名は死亡し、408名は負傷した。馬も三分の二に当たる119匹が戦死している<sup>21</sup>。死亡者の半分以上(70名)は、3月24日と3月27日の2回の攻城突撃戦闘における犠牲者であった。また、ほとんどの死傷者は、第一線の歩兵に集中する。4月6日夜、満身創痍の第二大隊の残部は、無事に城内から撤収できたが、もはや戦力にならないので、次の戦闘(4月7日、底閣、楊楼の戦闘)に赴く聯隊主力(第一、第三大隊)に同行せず、支隊本部、歩兵第十聯隊とともに、目的の泥溝に後退した。第五中隊兵士渋谷昇の最後の日記は、花満開の泥溝で記されている。

この寛ぎの休息もつかの間、翌日4月8日から14日間、第二大隊第六中隊残余83名(中隊長秋崎近蔵大尉)<sup>22</sup>と、第七中隊残余108名(中隊長高井兼雄少尉)<sup>23</sup>は、第一大隊(中川廉少佐)に配属され、またもや「嶧県附近の戦闘」に投入されたのである(死傷者なし)<sup>24</sup>。

ようやく一部兵員(703名)が補充できたのは、第二期南部山東剿滅作戦の中、さらに560名の死傷者(死亡141名)を出してから<sup>25</sup>、4月末である<sup>26</sup>。ちなみに、山東南部剿滅作戦全体において、歩兵第六十三聯隊は台兒庄の戦いを含む第一期の戦闘に死傷者1262名を出し、第二期(4.8－5.15)の戦闘に死傷560名を出した<sup>27</sup>。二ヶ月の戦闘で合計1822名が死傷し、編制定員(3747名)の半数の将兵が戦場から姿を消した。戦争の残酷は、“不敗の皇軍”にとっても同じである。

付録：初戦四日間歩兵第六十三聯隊戦死者リスト(3月28日以降略)

二、三名戦闘と無関係の死者も含まれる可能性がある。

1938/3/24	山根末吉	伍長	松江市和多見	台兒庄	
1938/3/24	永瀬民	歩伍長	松江市乃木	台兒庄	
1938/3/24	三澤整一	歩上	能義郡安来	三里庄	
1938/3/24	細田功	歩上	能義郡広瀬	台兒庄	
1938/3/24	八沢好夫	歩伍	仁多郡布勢	台兒庄	
1938/3/24	宮崎栄吉	歩上	仁多郡三成	台兒庄	
1938/3/24	高橋利一	歩上	仁多郡八川	台兒庄	
1938/3/24	阿合己範	歩伍	仁多郡馬木	支那	

1938/3/24	新田傳市	歩伍	大原郡阿用	台児庄	
1938/3/24	長谷川栄蔵	歩伍	大原郡加茂	台児庄	
1938/3/24	古林留由	歩伍	隠岐郡五箇	台児庄	
1938/3/24	重栖光人	伍長	隠岐郡五箇	台児庄	
1938/3/24	前田徳市	歩上	海士郡海士	台児庄	
1938/3/24	谷徳市	伍長	知夫郡知夫	台児庄	
1938/3/24	辻野馳一	歩軍	米子市観音寺	台児庄	
1938/3/24	加藤信夫	歩伍	気高郡安長	台児庄	
1938/3/24	長谷川玉平	歩上	気高郡河原	台児庄	
1938/3/24	松下長久	歩上	気高郡松原	台児庄	
1938/3/24	前野政晴	歩伍	気高郡岩坪	台児庄	
1938/3/24	谷川良吉	歩伍	気高郡青谷	三里庄	*
1938/3/24	狩野長利	歩上	東伯郡東園	台児庄	
1938/3/24	堀口勇	歩上	東伯郡妻波	台児庄	
1938/3/24	尾崎重雄	歩伍	東伯郡米田	三里庄	*
1938/3/24	黒川憲博	歩上	東伯郡巖城	台児庄	
1938/3/24	小田末広	歩軍	東伯郡横田	三里庄	
1938/3/24	大田巖	歩上	東伯郡上大立	台児庄	
1938/3/24	朝倉定光	歩伍	東伯郡田後	台児庄	
1938/3/24	前田優	歩准	東伯郡門田	台児庄	
1938/3/24	高塚良治	歩上	西伯郡諏訪	台児庄	
1938/3/24	奥谷勤	歩大尉	西伯郡浦津	台児庄	*
1938/3/24	安村基	歩上	西伯郡古豊千	台児庄	
1938/3/24	前田来一	歩伍	西伯郡平岡	台児庄	
1938/3/25	森井要口郎	伍	松江市東本	山東省前	(臨) 城
1938/3/25	山根恒雄	歩伍	能義郡広瀬	北支	
1938/3/25	松本強一	輜重上	周吉郡西郷	支那	
1938/3/25	濱尾一郎	歩伍	鳥取市賀露	敦上	*
1938/3/25	山根恒雄	歩伍	米子市角盤	囊荘	
1938/3/25	森山寿次	歩上	西伯郡中町	台児庄	
1938/3/25	仲村寿一	歩上	西伯郡真野	台児庄	
1938/3/26	早間夫之助	曹	松江市中原	台児庄	
1938/3/26	安倍武雄	歩上	松江市古市原	台児庄	
1938/3/26	福島岩市	歩上	八束郡意東	台児庄	
1938/3/26	近藤忠一	歩上	能義郡赤江	台児庄	
1938/3/26	小竹茂治	歩上	日野郡福塚	台児庄	
1938/3/27	永久巖	歩伍長	松江市大庭	台児庄	
1938/3/27	坂根幸雄	歩伍長	松江市大庭	台児庄	
1938/3/27	仁宮義雄	歩伍	八束郡森山	台児庄	
1938/3/27	松本巖	歩伍	八束郡千酌	台児庄	
1938/3/27	小竹原安政	歩上	八束郡講武	台児庄	
1938/3/27	副頼恵吉	輜重上	八束郡意東	支那	
1938/3/27	石本与一	歩伍	八束郡出雲郷	一野戦病院	
1938/3/27	松井秀清	歩上	八束郡来待	台児庄	
1938/3/27	伊藤敏雄	大尉	八束郡玉湯	台児庄	



1938/3/27	渡部芳夫	歩伍	能義郡安来	台兒庄	*
1938/3/27	足立一智	歩上	能義郡布部	台兒庄	*
1938/3/27	真鶴武雄	歩伍	仁多郡八川	台兒庄	
1938/3/27	安部清	歩伍	大原郡大東	台兒庄	*
1938/3/27	内田道雄	歩上	大原郡幡屋	台兒庄	
1938/3/27	藤原好市	輜重上	大原郡斐伊	支那	
1938/3/27	陶山重直	歩上	大原郡日登	台兒庄	
1938/3/27	大江定一	歩伍	海士郡海士	台兒庄	*
1938/3/27	湯本富美	歩上	海士郡海士	台兒庄	
1938/3/27	田中定竹	伍長	知夫郡浦郷	台兒庄	
1938/3/27	野川順	歩伍	米子市茶町	孟庄	
1938/3/27	山根勝實	歩軍	気高郡下砂見	台兒庄	
1938/3/27	杉原貞明	歩伍	気高郡宝木	台兒庄	
1938/3/27	山下秋義	歩伍	気高郡会下	台兒庄	
1938/3/27	原田幸雄	歩上	気高郡早牛	台兒庄	
1938/3/27	田中一美	歩軍	気高郡鷲峰	台兒庄	
1938/3/27	妻藤潔	歩伍	東伯郡湊町	台兒庄	
1938/3/27	村木勝利	歩中尉	東伯郡新町	台兒庄	
1938/3/27	筏津春美	歩伍	東伯郡別所	嶧県孟庄	
1938/3/27	井上克己	歩伍	東伯郡鋤	台兒庄	
1938/3/27	小谷源蔵	歩上	東伯郡大谷	台兒庄裴庄	
1938/3/27	安田吉蔵	歩上	東伯郡宇野村	台兒庄	
1938/3/27	山田武	歩伍	東伯郡野方	台兒庄	
1938/3/27	田中繁義	歩上	東伯郡門田	台兒庄	
1938/3/27	加門正義	歩上	西伯郡久吉	台兒庄	
1938/3/27	岡田茂章	歩伍	西伯郡市山	台兒庄	
1938/3/27	齊木文右衛門	歩伍	西伯郡保田	台兒庄	
1938/3/27	金田幸広	中尉	日野郡焼杉	台兒庄	
1938/3/27	松原芳雄	歩中尉	日野郡下安井	三里庄	*

## 注

1. 増援部隊の編制は「歩兵第六十三聯隊 台兒庄攻略戦闘詳報」中№846. №868. №893 (JACAR : Ref. C11111252700.) より、人員、武器の構成状況は、同資料「附表其十三」(JACAR : Ref.C11111253800. №1105)より算出。
2. JACAR : Ref.C11111729600. №1520 支那事変初期 北支における十五榴部隊を中心とする砲兵戦史資料。
3. JACAR : Ref. C11111266500. 画像47-43/56、画像の順番は逆になっていることを留意。(前掲歩兵第六十三連隊第二大隊第五中隊 台兒庄附近戦闘詳報)。
4. JACAR : Ref.C11111253400. №934-935.(前掲歩兵第六十三聯隊 台兒庄攻略戦闘詳報)。
5. 「第三十一師台兒庄戦役戦闘詳報」《台兒庄戦役史料選編》、《台兒庄戦役資料選編編集組・中国第二歴史檔案館資料編輯部》中華書局、1989年、28頁。
6. JACAR : Ref. C11111266500. №818-817.(前掲歩兵第六十三連隊第二大隊第五中隊 台兒庄附近戦闘詳報)。
7. 「二六号那天，敌人从大北门进来，占领了清真寺」前掲盛成《台儿庄记事》、232頁。
8. JACAR : Ref.C11111253400. №937. 前掲歩兵第六十三聯隊 台兒庄攻略戦闘詳報。
9. 台兒庄附近の戦闘に於ける教訓、JACAR : Ref.C11111730600. №1660. 支那事変初期 北支における十五榴部隊を中心とする砲兵戦史資料。

10. JACAR : Ref. C11111266500. No.825-824.(前掲歩兵第六十三連隊第二大隊第五中隊 台児庄附近戦闘詳報)。
11. 《涩谷升日記》3月23日条。曹聚仁《中国抗战画史》1947年、2011年、中国文史出版社再版、268頁。
12. 『歩兵第六十三聯隊史』(同刊行委員会、非売品1974年)604-826頁に載せている「戦没者名簿」。編集者の記録によれば、名簿は、鳥根県社会福祉部社会課「郷土部隊戦没者名簿及部隊資料」、鳥取県厚生部厚生援護課「鳥取県関係戦没者資料、其他」を利用して作成したものである。
13. 歩六三戦詳第十四号附表第十三、JACAR : Ref.C11111253800. No.1105. 第六十三聯隊のみ、配属部隊を含まず(前掲歩兵第六十三聯隊 台児庄攻略戦闘詳報)。
14. データは『歩兵第六十三聯隊史』(同刊行委員会、非売品1974年)604-826頁「戦没者名簿」より整理。
15. 范長江「慰問台児庄」、前掲《台児庄戦役史料選編》、267頁。
16. 「再吊台児庄」前掲盛成《台儿庄記事》、226頁。
17. 《涩谷升日記》3月23～4月6日条。曹聚仁《中国抗战画史》1947年、2011年、中国文史出版社再版、271頁。
18. 例えば、沈苏儒等訳《见证中国：爱泼斯坦回忆录》北京：新世界出版社、2004年、99頁。
19. 3月28日第三大隊は西北角を攻める前、三里庄に足止めされた激しい戦闘があり、30日、城外東部に展開した第一大隊も、黄庄の敵を攻撃した戦闘記録があった。共に城外に死者を出した要素を含む(JACAR : Ref.C11111253500. No.968、Ref.C11111253600. No.1009)
20. 3月28日以降、第三大隊第九中隊は第二大隊に配属された(Ref.C11111253500. No.968)。また3月28日反対の西北角から第三大隊第十一中隊が突入し、4月1日撤退している。その後主として西北城外で戦闘した。第一大隊は3月29日参入後、城郊外の東部、東北部で戦っていたので、城内の戦いに実際使われたのは第二大隊の四箇中隊と第十一中隊の延べ五箇中隊である。
21. 歩六三戦詳第十四号附表第十三、JACAR : Ref.C11111253800. No.1105.(前掲歩兵第六十三聯隊 台児庄攻略戦闘詳報)。
22. 第六中隊長伊藤敏雄は3月27日攻城中戦死したので、聯隊本部から秋崎近蔵大尉が出向し中隊長を代理した。
23. 中隊長大野謹之助大尉は3月24日の攻城中に負傷したので、同隊少尉高井兼雄が中隊長を代理した。
24. JACAR : Ref.C11111572000. No.1285-1289. 南部山東省 勦滅作戰 第2期戦闘詳報 戦闘詳報第7・9・10号 昭和13年4月8日～昭和13年4月27日(防衛省防衛研究所)。
25. 第十師団司令部、昭和14年3月24日調「各期戦闘に於ける死傷表」により算出。JACAR : Ref.C11111031400. 磯谷兵团(10 D)戦闘経過概要図 昭和12年8月20日～14年3月13日(防衛省防衛研究所)。
26. 「派遣輸送概見表」によると、第六十三聯隊の補充輸送は、青島の到着予定は4月22-23日となる。たとえ遅延がなくても、南部山東の前線に到着する時期は、5月の手前になろう。「派遣輸送概見表」「大陸指第113号に関する件」JACAR : Ref.C04120358900.(画像5/6、No.1042) 昭和13年「陸支密大日記 第16号」(防衛省防衛研究所)。
27. 前掲第十師団司令部、昭和14年3月24日調「各期戦闘に於ける死傷表」JACAR : Ref.C11111031400.